

貢院の前で哈芬は胡沅浦に付き添って立ち、一列になって入ってくる山西太原府の生員たちを眺めていた。龍門で最後に身体検査を受けたのは致庸だった。致庸はあの傲慢な落花生売りの秀才が間に合ったのかどうか気がかりで、不安げに目を細めて外を見ていた。検査を終えた兵士がかれを推して「入れ！」と怒鳴った。

致庸は弁当箱を取りあげて野次馬の方を顧みた。雪瑛が致庸にこつそりと手を振り、致庸は小さく微笑み返す。

「若旦那様はお目がよろしいことで！」

長栓がからかうと、雪瑛は思わず「お黙んなさい！」とたしなめた。

一方玉菡も馬車の中から致庸を見ていた。致庸の甘い笑顔を見ると、自分でもなぜだか胸がどきどきしてしまふ。

指揮官が哈芬に駆け寄って跪いた。

「大人にご報告申し上げます。生員の入場が完了いたしました。お時間でございます」

哈芬が胡沅浦を見ると胡沅浦はうなずいた。そこで指揮官は立ち上がり、長く引き延ばした声で叫んだ。

「門を閉じろーっ！」

兵士らがギギギッと音を立てて龍門を閉ざしかけたまさにその時、息をきらし人混みをかきわけて走ってきた茂才が大声で叫んだ。

「待ってくれ！ 待ってくれ！」

致庸は振り返り、茂才を見て立ち止まった。

龍門の指揮官は茂才を押しとどめて怒鳴った。

「待て！ おまえは遅刻だ！」

「皆様、手前は山西祁県が生員、孫茂才と申します。道が混んでおりましていささか時間をとられてしまいました。どうかお目こぼし願います。入れてください！」

「だめだ！ 遅刻は遅刻だ、入ることはまかりならん！ 立ち去れ！」  
茂才はカッとなった。

「よう、あんたら何かい、土地神様は神様と認めないつもりか！ 天子は英雄豪傑を重んじ文章をなんじらに教え、万般はみな下品にしてただ読書の高あるのみ（宋代、汪洙「神童詩」）。お上ですら読書人を敬われるというのに、おまえたちは何様のつもりだ？ わたしを入れないつもりか？」

「よくぞおっしゃいました！」

龍門の内側から致庸が叫ぶと、指揮官はカッとなって手を振った。

「たかが生員風情が生意気にも山西貢院の龍門で吼えただておるとは、引つ捕らえよ！」

数人の兵士が茂才に掴みかかり、暴れながらわめき散らす茂才と揉み合いになった。

「この人を捉えてはだめです！」

致庸が飛び出して茂才を庇うと、指揮官は苦々しげに言った。

「まだ不平を言うやつがおるか、だれか、こやつも掴まえろ！」

「どうしたらいいの？」

まだその場にいた雪瑛が慌てふためき、長栓も地団駄踏んで悔しがった。

「なんてこった、もうお終いだ！」

ふたりの背後では土地の有力者たちが首を伸ばして龍門を見ていた。陸大可が首をひねって馬車の中の娘に笑い掛けた。

「ハハ、これは賑やかなことになったな」

玉齒は相槌を打つ余裕もなく、固唾を呑んで門を見つめている。

「胡大人、ご覧なさい、これが山西氣質というものですよ！」

ずっと遠くから見ていた哈芬が眉をひそめた。兵士が二人を制圧するのを見て、哈芬は傍らの将校に命じた。

「連れて帰って尋問しろ！」

ところが胡沅浦が手を振ってこれを制止する。

「待て、大人、われわれも行ってみるとしよう」

胡沅浦と哈芬はゆつくりと龍門に向かった。茂才ともども兵士らにねじ伏せられていた致庸は、恐れることなく笑って言った。

「やあ、大官のお出しました！」

茂才は振り返って胡沅浦と哈芬を見たが、その顔にもやはり恐れる色はなかった。

「放してやれ」

穏やかな胡沅浦の言葉に、兵士らは致庸と茂才を放した。哈芬が咳払いして言った。

「おまえたち二人、目の前に立っておられるお方がどなたか存じておるのか？」

致庸は冷ややかに笑った。

「存じております。お一人は山西総督の哈芬大人、いま一人は勅命大臣にして内閣学士であり督察山西学政でもいらつしやる胡大人です」

哈芬はフンと鼻を鳴らした。

「知っていながらなぜ跪かぬ？」

致庸は高ぶるでもなく卑屈にもならず言った。

「大人、別の場所ならもちろん即座に跪かせていただきます。しかし山西貢院の龍門の前では、生員は跪く必要はありません」

「胡大人、これがわれわれ山西の生員なのです。ろくに書物も読まぬくせに、どいつもこいつも傲岸極まりない！」

哈芬はカツとなって胡沅浦にそう言うと、振り返って致庸を怒鳴りつけた。

「きさま、たかが秀才の分際で何という口をききおるか。是非ともお聞かせ願いたいものだが、どうして貢院龍門の前では勅命大臣と本官に跪かなくていいのだ？」

茂才が前に出た。

「大人、わたくしがお答えいたしました。こちらの生員が跪く必要はないと申し上げたのも、

むろん道理があるのでございます」

「どのような道理だ？」

「大人、いま大人の目の前に立っているのは単なる秀才に過ぎませんが、しかしかりにわれわれがこの門をくぐり、今年科挙に合格し、来年あるいは進士に登第し、あるいは状元に選ばれば、三年五年経ち、国の重臣となり、大人と対等な立場にならぬとも限りません。そうであるならば、今日われわれはなぜ跪かねばならぬのでしょうか？」

致庸は茂才を見てほうと感嘆の声をあげた。もともと騒ぎを期待していた野次馬たちは状況が緊迫するのを見て喝采をあげた。哈芬の顔はもはや怒りを隠しようがなくなった。

「生意気な！ もしわしが是が非でも跪けと行ったら如何いたす？」